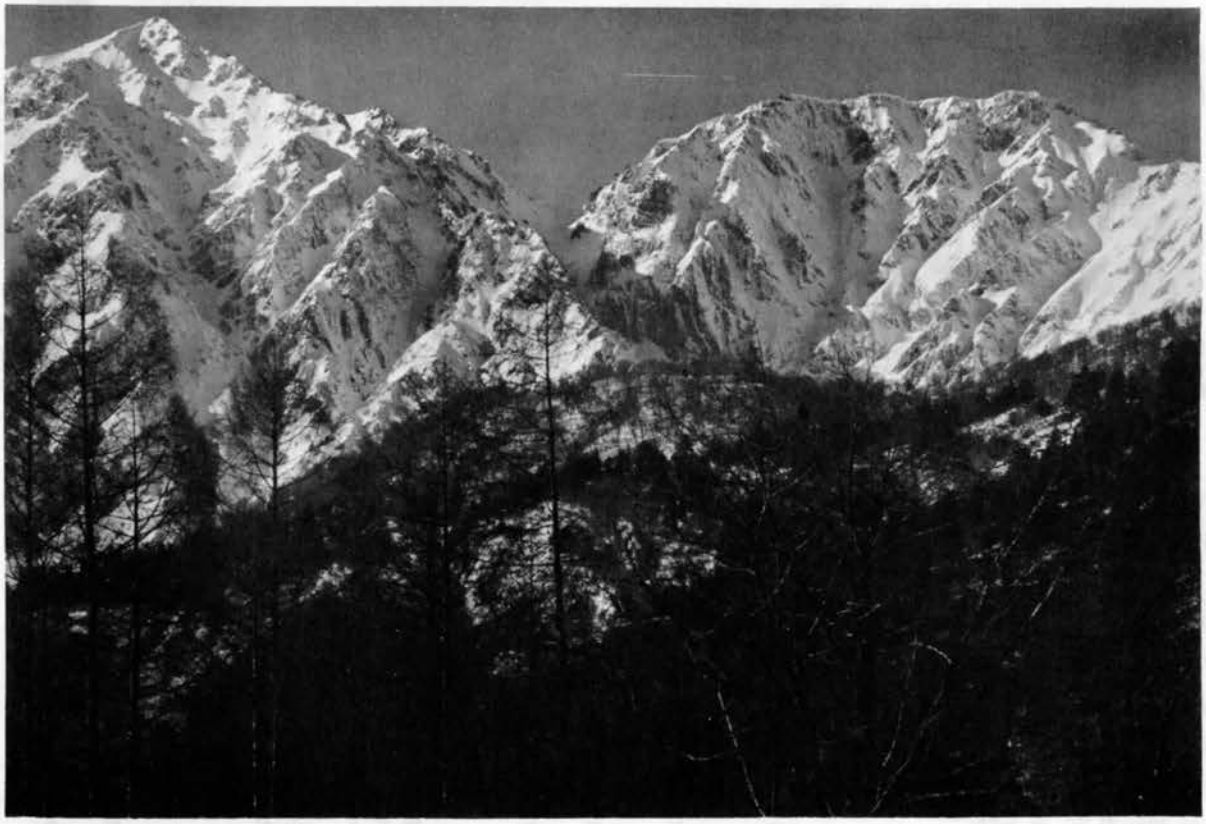
山と博物館

第20巻 第1号 1975年1月25日 大町山岳博物館



白馬鑓ガ岳と杓子岳　　撮影　古幡和敬

天然のゲレンデで

市内のゲレンデには、今年も色とりどりのスキーウェアーの花が咲き乱れる。

インフレ、不景気など他国の話では…と、そんな錯覚におちいってしまう。スキー人口一千万人とか一千五百万人とかいわれるが、いったいどこまでふくれあがることやら…。

私とスキーとのふれ合いは、満五歳の冬から始まった。小学校に入ってからは、冬になると村のわんぱく仲間とスキーに明け暮れる毎日だった。ゲレンデもリフトももちろんない裏山の杉木立からつづく山の畑が、かっこうな自然のゲレンデだった。「いくぞ！」「どけよー」かすりの半天をひるがえして、つぎつぎと滑り降りた。「用意ドン！」一列に並んで、まっしぐらに決勝点をめざす。弟や妹たちが声援をおくる…。「ものすごく滑るワックスを塗ってやるョ」何も知らない仲間たちのスキーにクレヨンを塗りつけて、競争相手を牽制したのは、現在、鹿島槍国際スキー場で活躍しているO課長だ。あとで仲間にばれて、みんなできびしい抗議を申し入れたものだった。バッケンの革が切れてしまっておふくろのモンペのヒモを失敬して、お目玉をくらったこともあった。パラレル、ウェーデルン、ピボットターン、基礎も何もあったものでない。全制動、半制動、回転、天然のゲレンデの中で、いつの間にか身につけていた。

スキー学校、親子スキー教室、ジュニアスキースクールなどが各地で開かれる。私もスキー学校の指導員として派遣される、「基礎が大切」「安全で正しいスキーを」「はい！膝を曲げて…」一人一人に注文をつけたり、手本を示しながら一。懸命にスキーを操作する初心者や子ども達の姿に、ほんとうにこれでいいのかな？ふと、味けないような空しさを感じる。リフトで運ばれ、斜面を滑るスキーヤーを見ていると、画一されたような姿で降りて来る。まるで、ベルコンに乗せられて吐き出される工業製品のように見えてくるのは、ひが目というものか…。（西沢　要）

越中の嶽越え道開修（2）

下坂宣一

（資料の三）

道程表

越中国富山ヨリ原村マテ六里斗、原村ヨリ温泉マテ五里斗、温泉ヨリ黒部川マテ三里斗、黒部川ヨリ信州境針ノ木峠マテ弐里拾八丁斗、針ノ木峠ヨリ信州野口村マテ四里斗　通計弐拾里十八丁

池田本道通り松本マテ拾里

右野口村ヨリ松本道通り上田マテ弐十二里（松川組道通り同所マテ七里）

大平越道通り同所マテ拾壱里

原村ヨリ黒部川マテ里程八里道幅弐間通り修理並家建等出来表

一弐千九百五拾八圓八拾九銭五厘

原村ヨリ黒部川マテ五里間人夫壱万弐千五百五拾七人但シ壱歩ニ付人歩五歩八厘余、此賃銭壱人ニ付食料等打込弐拾三銭五厘宛

一弐千八百六拾弐円

温泉ヨリ黒部川マテ三里間人夫壱万千四百四拾八人但シ壱歩ニ付人歩八歩八厘余、此賃銭壱人ニ付食料等打込廿五銭宛

一五千弐百四拾七円

人夫弐万九百八拾八人歩割同ジ

一弐千三百八拾五円

黒部川ヨリ針ノ木峠マテ弐拾里八丁間人夫九千五百四拾人但壱歩ニ付壱人七歩六厘六分、此賃銭壱人ニ付食料等打込弐拾五銭

一弐千七百八拾五円

針ノ木峠ヨリ筑摩縣下字山ノ神マテ三里間人夫壱万千百四拾人但シ壱歩ニ付八五九余、此賃銭壱人ニ付食料等打込廿五銭宛

右山ノ神ヨリ野口村マテ壱里間八従来営繕方有之ケ所ニ御座候

一七百八拾七円　真川（はしかし）橋

内三円五拾銭　百七拾五本斗、木代壱本ニ付平均弐銭宛、此木原村本宮村等村講上有地有ノ分買上代用仕候

百三拾五円　木挽四百五拾壱人ニ付食料等打込廿五銭宛

百八拾七円五拾銭　大工七百五十人壱人ニ付食料等打込廿五銭宛

百八拾円　人夫九百人壱人ニ付食料等打込廿銭宛

弐百八拾壱円釘等惣金具代

一千六拾九円五拾銭　黒部川刎橋

内三円　弐百本斗木代壱本ニ付平均壱歩五厘宛此木官林ニ有之立木買上代用仕候

弐百拾円　木挽七百人壱人ニ付食料等打込三拾銭宛

弐百三拾七円五拾銭　大工九百五拾壱人ニ付食料等打込弐拾五銭宛

弐百弐拾円　人夫千百人壱人ニ付食料等打込弐拾銭宛

三百九拾九円釘等惣金具代

一七拾五円　湯川橋

内四拾五銭　三拾本斗木代壱本ニ付平均　壱銭五厘此木前同断

拾八円　木挽六拾人壱人ニ付食料等打込三拾銭宛

大工八拾人壱人ニ付食料打込弐拾五銭

人夫百人壱人ニ付食料打込廿銭

一三百五拾五円　筑摩縣下高瀬川橋

一百五拾円　同縣下賀川橋

一九百円　荷物継立家建六ケ所

但シ字足洗川辺温泉辺黒部川辺字針ノ木澤辺筑摩縣下字岩小屋澤辺山の神辺都合六ケ所

通計一万四千三百拾九円三十九銭五厘

右道修理等入費元利支消之方通行人馬等ヨリ左之通道銭取受可申候

新川口並信州口通行人馬等員数

暨銭取受高壱ケ年分目算表

一千六百弐拾円　通行人三万弐千四百人

但壱人ニ付五銭宛取受可申候

一千百三拾四円　同荷物壱万六千弐百箇

但シ荷負人共壱箇ニ付七銭宛取受可申候

一五百四拾円　同駄荷五千四百駄

但シ壱駄ニ付拾銭宛取受可申候

一弐拾壱円六拾銭同駕籠百八拾挺

但シ壱挺ニ付拾弐銭宛取受可申候

通計三千三百拾五円六拾銭

右歳入金高ノ内

五百円　年中道路営繕方手當

四百八十壱円七拾七銭五厘　社費

弐千弐百三拾三円八拾弐銭五厘　前條惣元金利息

但シ利息ハ壱円ニ付壱ケ月壱銭三厘宛ノ割合

残百円　元金ヘ消込

右利息高ハ初年ノ計算ニ御座候得共次年ヨリ元金ニ従テ減少仕候故其残金余ノ金高モ元金江消込可申依テ其方法両三年分ヲ左ニ記載仕候

一壱万四千三百拾九円三拾九銭五厘　元金高

此利息弐千弐百三拾二円八拾弐銭五厘

百円　元金江消込

右　初年分

一壱万四千弐百拾九円三拾九銭五厘　元金高

此利息弐千弐百拾八円廿弐銭五厘

右　次年分

一壱万四千百三円七拾九銭五厘　元金高

此利息弐千弐百円拾九銭弐厘

百三拾三円六拾三銭三厘　元金高江消込

右　三年目

右之通リ計算仕候得者弐拾壱ケ年十ケ月ニ至リ元利皆支消仕候趣然ル上ハ道銭取受不申候

右之通路修理入費暨（きせん）銭道銭取受方等方法如斯御座候旦社内百端之取締ハ社長之者引受毫モ疑惑（ギワク）ヲ容ル事無之様可仕候奉存儀以上

明治八年八月　石川縣士族　寺西直通㊞

同　島田敬之㊞

新川縣權令山田秀典殿

註これには端書が書かれている「明治八年八月新川縣江打達ス扣書事、入用旨ハ富山紙屋平七止宿、おいて金沢社中衆中ヶ拝借いたし写書候也　九月廿二日」　これから推察して明治八年八月には金沢社中は新川縣へ上申書を提出してあったようである、九月現地調査をして、これらの控を持ち帰ったものと思われる。

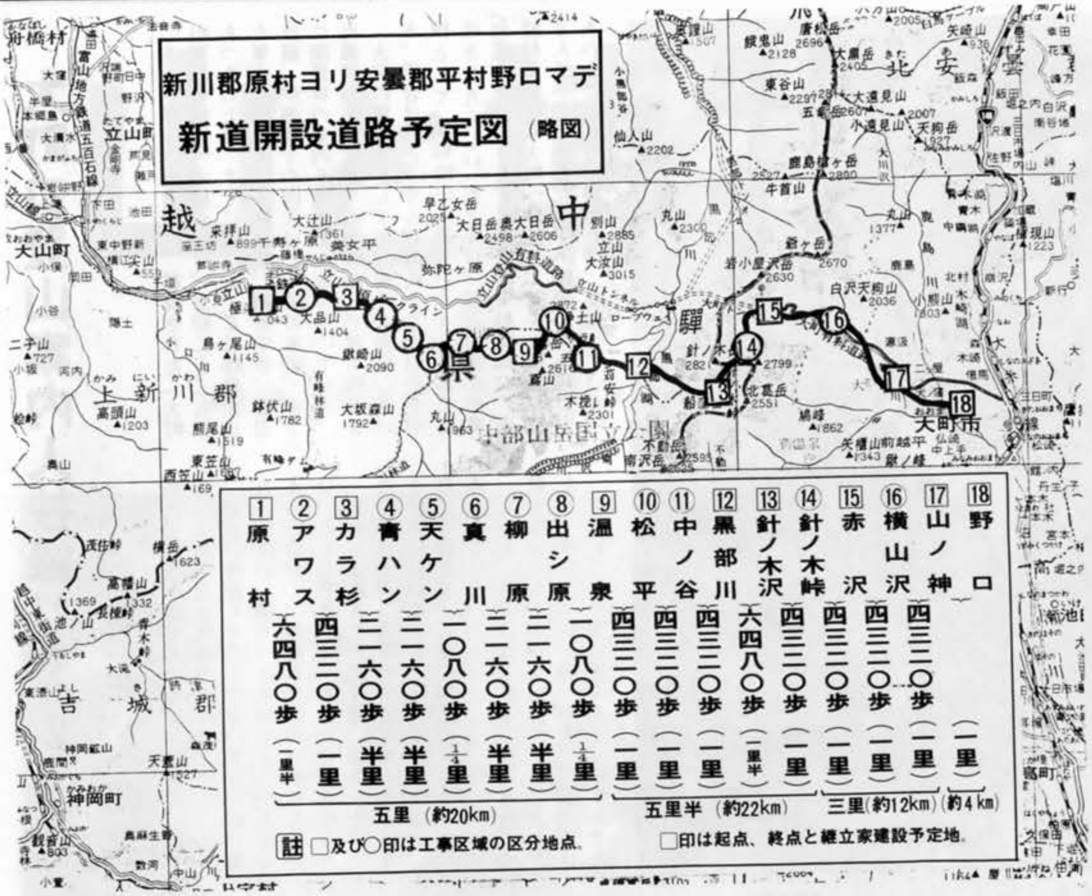
（資料の四）

新川縣下越中国新川郡原村ヨリ筑摩縣下信濃国安曇郡野口村迄幅弐間通山道修開目論見之表

一金弐千九百五拾円八拾九銭五厘

原村より温泉迄五里間石工並道造人夫

合壱万弐千五百五拾七人賃銭食料共打
込壱人ニ付廿三銭五厘宛ノ見図リ
但シ諸職人手當方平均ナリ
此内譯
（明細に記録されているが長文になる
ため省略する）
一金五千弐百四拾七円
温泉ヨリ針ノ木峠マテ五里拾八丁石工



区間	距離	里程
1 原村 ― 2 アワス	六四八〇歩	（一里半）
2 アワス ― 3 カラ杉	四三二〇歩	（一里）
3 カラ杉 ― 4 青ハン	二一六〇歩	（半里）
4 青ハン ― 5 天ケン	二一六〇歩	（半里）
5 天ケン ― 6 真川	一〇八〇歩	（1/4里）
6 真川 ― 7 柳原	二一六〇歩	（半里）
7 柳原 ― 8 出シ原	二一六〇歩	（半里）
8 出シ原 ― 9 温泉	一〇八〇歩	（1/4里）
9 温泉 ― 10 松平	四三二〇歩	（一里）
10 松平 ― 11 中ノ谷	四三二〇歩	（一里）
11 中ノ谷 ― 12 黒部川	四三二〇歩	（一里）
12 黒部川 ― 13 針ノ木沢	六四八〇歩	（一里半）
13 針ノ木沢 ― 14 針ノ木峠	四三二〇歩	（一里）
14 針ノ木峠 ― 15 赤沢	四三二〇歩	（一里）
15 赤沢 ― 16 横山沢	四三二〇歩	（一里）
16 横山沢 ― 17 山ノ神	四三二〇歩	（一里）
17 山ノ神 ― 18 野口		（一里）

1〜9：五里（約20km）　9〜13：五里半（約22km）　13〜17：三里（約12km）　17〜18：（約4km）

註　□及び○印は工事区域の区分地点。　□印は起点、終点と継立家建設予定地。

並道造人夫合弐万九百八拾八人賃銭食
料共打込壱人ニ付弐拾五銭宛ノ見図リ
此内譯
（省略す）
一金弐千七百八拾五円
針ノ木峠ヨリ筑摩縣下山ノ神迄三里間
石工並道造人夫合壱万千百四拾人賃銭
食料共打込壱人ニ付弐拾五銭宛ノ見図
リ
此内譯
（省略す）
一金七百八拾七円　　真川刎橋
（内訳省略す）
一金千六拾九円五拾銭　黒部川刎橋
（内譯省略す）
一金七拾五円　　湯川橋
（内譯省略す）
一金三百五拾五円　　筑摩縣下高瀬川橋
（内譯省略す）
一金九百円　　荷物継立家建六ケ所
（内譯省略す）
通計壱万四千三百拾九円三拾九銭五厘
右道路修開目論見相立申候間此段御座申上
候
以上
明治八年九月二十五日整

註筑摩縣への提出資料の一部と思われるが余りにも長文のため掲載できないのは残念である

（資料の五）

奉願口上書
一檜木長三間ゟ九尺迄
目通　壱尺五寸廻ゟ　百弐拾本
三尺廻り迄
代三円六拾銭　但シ壱本ニ付三銭
一黒部木長三間ゟ九尺迄
目通　壱尺五寸廻りゟ　三拾本
弐尺廻り迄
代九拾銭　　但シ壱本ニ付三銭
一椈木長三間ゟ九尺迄
目通右同断　　百　本
代三円　　但シ壱本ニ付三銭
一雑木長三間ゟ九尺迄
目通　弐尺廻りゟ　五百五拾本
弐尺五寸迄
代五円五拾銭　但シ壱本ニ付壱銭
一雑木小苗木　　三千本
代三円
木数合計三千八百本
代價　拾六円
右者信越道路修補ニ付道筋差障リ木御拂下ケ頂戴仕仮橋小屋掛ケニ相用申度奉存候間此段　御採用□成下□度奉願上候以上
第十二大區二小区平村
明治八年十一月　願人　飯島善造
右同断　海川三郎衛
第十一大區七小区八坂村
右同断　北澤雄衛
同大区八小区美麻村
右同断　小林静吾
同大区六小区社村
願人　一志佐和次
筑摩縣参事高木惟矩殿

註この資料によって筑摩縣えの「道路開修上申書」は、これと同じ日時か少なくともこれより早目に提出されたものと思われる。

（資料の六）

書面管下信濃國安曇郡平村之内野口ヨリ新川縣管下越中國新川郡原村へ之新道民費ヲ以開造之上費用爲消□弐拾壱年拾ケ月之間通行之者ヨリ道銭取立之義願之通聞届候条雪解次第速ニ着手候義ト可相心得事
但修築落成之上ハ出来形精算帳ニ図面相添猶可届出事
明治八年
十二月八日　筑摩縣参事高木惟矩　［筑摩縣参事高木惟矩］

註明治八年十二月八日正式に多年の願いであった認可が下されたのである。
（前大町市公民館長）

大町口登山案内人抄録―その2―

荒井今朝一

大正六年（一九一七）、結成された「大町山案内者組合」の組合員は、当初二十二名であったことは、すでに述べた。この時参加した案内人のうち、大西又吉、勝野玉作、伝刀林蔵、伊藤菊十の四氏は、明治の末頃、すでに測量等の案内を強力もかねてやっていた。百瀬慎太郎氏は、「山岳夜話」で彼ら四名を「大町の案内人としての元祖」と表現している。組合は、どうやら百瀬氏とこの四氏を中核として、比較的山に詳しい人々を集めて結成されたらしい。たとえば、松沢由蔵氏や黒岩直吉氏は、それぞれ当時の平村海の口、美麻村高地から大町へ移住し、細々と農業を営なんでいた。そんな折、伊藤菊十氏と親交があったことから、誘われて、参加している。

黒岩直吉氏　黒岩家所蔵

両氏とも三十歳であった。ちなみに、伝刀氏は、この時三十九歳であった。

組合の性格もどちらかといえば、山に通じた人間達の「隣りづきあい」といったものであったらしく、規約も当時の一般的な心得といったものであった。たとえば、賃金は一日「先達（案内人）一円十銭、強力九十銭」となっているが、当時の物価が米一升およそ二十銭といわれるから、決して安くはない。また、背負荷は、八貫（約三十キロ）以内と定められている。

しかし、現実には、客が、かなり強引な行動を強いても、なかなか拒否できなかったらしい。後に、「山と旅」の中で、松沢氏は、「どうしたって客に逆ふことはできません。」と述べている。特に古参の案内人は、そうであったのだろう。百瀬氏の理想は「案内人と登山者の関係は、共に山に親しみを有った者同志で良き伴呂であるとともに…。」であったが、なかなか実現されなかった。そこに、山は自から登るものといった、舟田三郎氏に代表される「無案内無人夫」登山の提唱も始まるのである。

伝刀林蔵氏

こうした案内人達の間に、自からの地位の安定が問題となり出したのは、昭和二年（一九二七）の針ノ木遭難前後からであった。たとえば、今日でも、大和氏側では、「出発を止めた」といい、早大側は、「いや止めなかった」という。事実は、検討の必要もあろうが、とにかく案内人にとっては、重要な問題であった。

昭和六年（一九三一）の「山と旅」一〇四号における「フェラー座談会」によれば、当時、組合の長老となっていた伝刀氏は、河田慶氏の「暴風雨が来そうな時、登山者に、滞在を勧めて、くってかかって来られたらどうするか。」との問いに「私は喧嘩してもその場合出発を見合せます。」と断言している。伝刀氏は、当時、それだけのことが言える地位にいたらしく、客も、もっぱら指名ばかりで、案内人としてはもちろん、一流のクライマーとしても評価されていたことが、うかがわれる。しかし、他の多くの案内人達は、なかなかこれだけのことは言えなかったらしい特に、「一流の登山家」の案内は大変だったようで、黒岩直吉氏は、同誌の中で「去年冠さん（松次郎）を案内して黒部へ行ったが、こりごりした。」と述べている。

しかし個人的には、客との間にも強い友情が生れた場合も多い。黒岩氏は、滑落した客を身を呈して助け、以後、ずいぶん親しくしている。松沢氏も、秋には茸を送り、相手方からは、ピッケル、佃煮、菓子等が送られている。どの案内人達もとりわけ、古参の案内人ほど客とは親交を結び、前述の問題もまたそうした中で解決されていった。

松沢由蔵氏

案内人組合もその後大いに発展してゆく。大正から昭和のはじめにかけて、有名なアルピニストが大町を訪れる。昭和に入ると、各大学の山岳部が続々と入山する。案内人にも新しい人々の名が見えはじめる。そして戦後の大衆登山の幕開けを迎えるのである。

（次号では、昭和時代の案内人及び、白馬の細野口案内人の紹介をしてまとめとする予定でおります。なお文中に使用しました似顔絵は「山と旅」第一〇四号より引用させていただきました）　山岳博物館・学芸員補

図書紹介

雪国のスズメ　佐野昌男著

スズメは身近かにいる鳥でありながら余り知られていない事が多い。特に人と鳥との関係についてスポットをあて、わかりやすく説明している。　誠文堂新光社　九八〇円

訂正

前号1P表紙下、喜びと闘いと……喜びと潤いとに―　2P下段　善右門…善右工門に訂正

山と博物館第20巻第1号　一九七五年　一月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL②〇二二一　大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町　大糸タイムス印刷部
定価　年額四〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一三、二九三）